魔王と勇者の恋愛録

ぞえまる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある魔王と勇者の日常と恋路を綴った高校の記録である。

魔王と勇者の行き着く先は、どうなることやら。

目次

第１話　魔王と勇者のＳＨＲ（朝の会）　―――― 1
第２話　魔王と勇者の放課後（カツアゲ）　―――― 5
第３話　魔王と勇者の愛してるよゲーム《前編》　―――― 10

第1話　魔王と勇者のＳＨＲ（朝の会）

「おい魔王、お前俺の席で何してやがる……」
　俺こと新谷真桜（あらやまお）は俺の席に座り俺のコーラを飲む紫色の髪のツインテールの少女に若干のドスを効かせた声で問い掛ける。
「んぎゅっ!?げほっ、げほっ……あ、あこは悪くないもん！この前真桜があこの漆黒のシュワシュワを飲んだお返しだもん！」
　俺が背後から突然声をかけたせいで驚き、コーラを喉に詰まらせながらも子供っぽく言い返す少女……宇田川（うだがわ）あこは涙目で反論する。
「その件は悪かったな。けどお前が飲んでるその漆黒のシュワシュワは５００ｍｌであって俺が昨日飲んだお前の漆黒のシュワシュワは３００ｍｌなんだよこの魔王っ！」
「うわああ!!ちょっ、離してぇ!!!」
　俺は半分キレながらあこの額にアイアンクロー（手加減済み）を食らわせる。
「あーあ、新谷君と宇田川さんまたやってるよ。」
「あの２人いつも飽きないよねー。」
「ホント、勇者と魔王って感じなのに仲良いよね。」
　周りの女子生徒らがそんな会話をしている事が聞き取れる。俺とこの魔王の仲がいい？はっ、冗談はうちのクラスの担任の頭だけにしろよ（担任はカツラを被ったハゲ）。
「ね、ねぇ真桜くん、そろそろあこちゃんの頭離した方がいいんじゃ……」
「……はぁ……」
　背後から聞こえた別の女子生徒の声を聞き、ため息を吐きながらあこの頭から手を離す。
「うぅ……真桜がいじめるよぉ、六花（ろっか）ぁ……」
「あはは……そんなに痛かったの？」
「う～ん……あ、あんまり痛くないや」
　俺を止めに入った女子生徒の名は朝日六花（あさひろっか）
　俺とあこと同じクラスの奴だ。

「はぁ……後は俺が飲むから返せ。」
「あっ」
俺はあこの手から半分以上減ったペットボトルを取り、そのまま勢いよく口の中に流し込む。若干炭酸が抜けたのか、刺激よりも甘みの方が強く感じる。
「あああぁぁぁ!!!!」
そして次の瞬間、あこは顔を真っ赤にして声を上げる。
「うるせぇなぁ……何だよそんな変な声出して。」
「だっ、だって……その……間接キス……」
「あ？聞こえねぇよ。」
ゴニョゴニョと下を向きながら耳まで顔を赤くするあこ。
「おーい、どうしいだっ!?」
何を言いたいのか問い詰めようとした瞬間、後頭部に謎の衝撃を喰らい、短い悲鳴をあげて後ろを見る。
「アンタねぇ……ノーデリカシーの名を欲しいままに行動しちゃダメでしょ。」
「んだよ明日香（あすか）……叩く事ねぇだろ……」
後ろを見ると、あこや六花と同じクラスの戸山明日香（とやまあすか）がいた。片手には通学用のカバンを持っており、おそらくそれで俺の頭を殴ったのだろう。ひっど。
「ほら、２人を見てみなよ……」
「あ？」
明日香に言われた通りにあこと六花の２人を見てみる。
「あぅ……ま、真桜と……ちゅー……真桜と……」
「な、なんかすごいの見ちゃった……」
２人揃って顔を真っ赤にしている。特にあこ。
「で、顔真っ赤にしてる２人が何だ？」
「あのねぇ……」
呆れた顔をする明日香。なんで？
「とにかく、アンタはあこの面倒見なさい。」
「はぁ？何で俺がこの魔王の面倒見なきゃ「見・て・ね・？」分かった

よ……」
　明日香に言われた通りに、顔を真っ赤にしてフリーズしているあこの前に立ち、呼びかけを試みる。
「おーい魔王、センコーが来るからさっさと移動しろ。」
「真桜とキス……真桜と……あぅぁ……」
「チッ……めんどくせぇ……」
　目の前で手を振ってみるが、顔を赤くしたままニヤニヤしているため、明らかに使い物にならない。しかし、コイツを俺の席から引き剥がさない限り、俺はこの窓際の一番後ろという最高の席から離れなければならない。となると……
（まぁ……コイツ小さいからいけるか？）
「はぅあ!?」
　俺はため息を吐きながらあこの小さな膝へと片手を回し、もう片方をうなじの方へと回し、そのまま抱き上げる。あ、これ所謂お姫様抱っこって事か？
　てか周りの女子共、さっきからキャーキャーうるさい。マジで黙れ（辛辣）
「ほい、お前の席はここだ。」
　俺は完全にフリーズしたあこを席へと戻し、俺は席へと戻り事前にコンビニで購入していた漫画雑誌を取り出し、足を机に乗せて読み始める。
「よーし、全員席に……って、新谷！お前は机から足を下ろせ！行儀が悪いぞ!!」
「……あ、この漫画連載止まってら、好きだったんだけどなぁ……」
「聞いているのかっ!!」
　担任が教室の入り口から入って来てから文句を言ってくる。
「うるさいっすよせんせー、その髪の毛と同じくらい静かだったらどんだけ地球が救われた事か。てか、今日はカツラ被ってないのね。いいと思うよ、正直者は俺好きだし。」
　担任のハゲ頭を一瞥して軽く文句を言いながら視線を漫画に戻す。

あ、この連載中止になった漫画家病気なのか……大変だなぁ……
『ぶふっ!!』
教室からは俺のセンコーに対する対応に周囲から笑い声が漏れる。
「っ!!!お前は先生を何だと思っている!!少しは敬わんか!!!」
「あーはいはい、敬える先生は敬いますわ。」
そんな事を言いつつも、漫画からそれ以上視線を離さない。こっちはハナから敬うつもりはねぇんだよ。俺アンタ嫌いだし。
「……チッ、全員席につけ!」
俺がそれ以上動かない事を察したのか、担任は機嫌を悪くしながら生徒に指図する。
こうして、俺は担任の朝のＳＨＲ(ショートホームルーム)が終了するまで、漫画を読み続けるのだった。
「真桜と……ちゅー……ふふっ……♪」
「あー……これは当分使い物になんないか……」
その日の朝のＳＨＲ(ショートホームルーム)は、全く話を聞いていない魔王と勇者の２人がいたとかいなかったとか、後に明日香は語る。

第２話　魔王と勇者の放課後（カツアゲ）

カツアゲとは、恐喝して金銭などを巻き上げることをいう隠語の事である。

「ねぇ、宇田川さんって新谷さんと付き合ってるの？」
「え!?」
　ある日の放課後。あこは教室にて３人のクラスメイトと話していた。ちなみに、明日香は教師にレポートの提出。六花は単純に行方不明である。あこは教室に残っていたクラスメートと話す形で２人を待っていた。
　そんな中、突然の質問にあこは驚いて戸惑ってしまう。
「あ、あこは真桜と付き合ってないよ！真桜はあこの絶対的な闇のライバルだから！そんな関係じゃないよ!?」
　顔を真っ赤にしながら真桜の事をライバルと呼ぶあこ。まったくと言っていいほど説得力がない。
「でもさ、新谷君ってさ、見た目だけはイケメンだよね～」
「えぇ……でも髪は金髪に染めてあるし、耳にピアスもつけてる不良だよ？それに中学時代なんかヤバいって噂もあるし……」
「「噂？」」
　女子生徒の１人は、息を呑み、真桜の噂について話し始める。
「なんでも新谷君、ここに来る前の中学で年上の不良２０人を相手に再起不能にしたとか……」
「「２０人!?」」
　まさかの噂にその場にいる全員が驚きを現わにする。普通なら冗談だと思うかもしれないが、普段の真桜の担任に歯向かう態度や素行の悪さが、噂の信憑性を増していた。
「他にもカツアゲとかしてるって噂もあるし……」
「真桜はそんな事しないもん!!」

突然、あこが大きな声で反論する。
「なーんだ、やっぱり宇田川さんって、新谷君の事好きじゃん。」
「ち、違うもん！あこと真桜は、ただのライバルで……っ！」
「あ、新谷じゃん、そんな所でなにしてんの～？」
「え!?ま、真桜!?」
クラスメイトが突然廊下を見てあこに呟くように真桜の姓を呼ぶ。
あこは慌てて後ろを見るが、その後ろには誰もいない。
「やっぱり宇田川さんって新谷の事好きだよね。」
「～～～っ!!!」
顔を真っ赤にして、プンスカと怒るあこ。
「でもさ、新谷って見た目不良だから、ぶっちゃけあそこまで距離近くできる自信ないわ～」
「あ、それ分かる。ホント、それに立ち向かって行ける宇田川さんってホント凄いよね～」
「そうかな？真桜はいい人だよ？」

一方その頃、羽丘学園近くのコンビニの駐車場では
「ぶえっくしょい！……誰か噂でもしてんのか？」
大きなくしゃみをしながらも、真桜は手に握られた財布に視線を落とす。
「ちっ、大した額持ってねぇのかよ使えねぇな。」
「「ず、ずびばぜん……」」
真桜は黒い財布の中身をつまみながら、目の前でボコボコにされた状態で正座をさせられている3人組に冷めた目を向ける。
ボコボコの3人組の服装は真桜に負けず劣らずの柄の悪い服装をしており、明らかにガラの悪い不良だった。
「なんで2年のアンタらが俺に喧嘩ふっかけてきたのか知らねぇけど、相手くらい選べよ先輩？」
この状況を分かりやすく説明すると、真桜が適当に歩いていた所、不良3人組にカツアゲをされ、返り討ちにして逆に巻き上げているのである。

「だいたい3万円か……いやぁ、丁度アイスが食べたかったから助かったよ先輩。わざわざ恵んでくれてありがとね！」※こいつカツアゲの被害者です
「いや……恵んだと言うよりただの強奪……」※こいつカツアゲ加害者です
「それに俺らちょっとしか手を出してないのに一方的にボコボコにされたんすけど……」※一応コイツも加害者です
「しかも攻撃と同時に財布奪うとか……どんだけ器用な殴り方……」
※もう一度言います、コイツら加害者です。
「あ〝？」
「「いえ！何でもありません！」」
　先程まで清々しいまでの笑顔だったというのに不良達が発言した瞬間に一瞬で氷点下の瞳になる真桜。まさに悪魔である。
「さてと、とりあえずハーゲ〇ダッツ買って……う～ん……後は募金で良いや。」
「「え?!」」
　なんと、真桜は不良3人組を駐車場に正座させたままコンビニに入り某高級アイスをいくつか買い、不良3人が見ている前で残った2万数千円を募金箱に突っ込んだ。一連のやり取りを見ていた店員さんも思わずギョッとしている。
「それじゃあ先輩、次に俺に喧嘩ふっかけてくる時はもっと持ってきてくださいね？」※もう一度言いますがコイツ被害者（悪魔）です。
　淡々と表情を変えずに真桜は空になった財布を目の前に起き、そのまま立ち去った。
「「こ、この魔王がぁぁぁぁ!!!!!!」」
　その場には、不良の断末魔が響くのだった。

「なんかごめんね2人共、帰り待ってもらっちゃって。」
「私は平気だよ。」

「あこも大丈夫！」
　明日香、六花、あこの３人はそれぞれの用事を終え、帰宅路を辿っていた。
「そういえば、あこちゃん真桜くんと一緒にいなくていいの？」
「あー、なんか真桜ね、『アイス食べたいからコンビニ行ってくる。危ないからお前は付いてくんな。』って言ってどっか行っちゃった。」
「え、都会でアイス買いにコンビニに行くのは危険なの？」
「いや、そんな訳無いでしょ……」
　六花の素朴な疑問に明日香はツッコミを入れる。
「ていうか、私はあこが真桜を追跡しようとか言い出してついていかなかったことに対して驚いてるんだけど……」
「あこね、『魔王なら城で待ってるのが常識だろ。わざわざ出向くまでもない。』って言われたの。」
「て、手懐けられとる……っ!?」
「なんていうか……流石真桜……」
「？」
　完全にあこの扱い方を把握している真桜に明日香と六花は呆れと簡単の混じった声を上げる。
（あれ、確か真桜くんって今日は財布忘れたって嘆いてたような……？）
「あ、真桜！」
　六花が一つの疑問を浮かべた瞬間、あこが声を上げて真桜の名を呼ぶ。よく見ると道の先にビニール袋を抱えた真桜がいる。
「……ん？あぁなんだ、野生の魔王か。」
「野生じゃないもん！漆黒の魔王だもん！」
　あこを見つけた真桜は野生のスライムを見つけたかのような目をした後に背後にいる明日香と六花をを見る。
「なんだ、お前らも一緒だったのか。」
「真桜、そのビニール袋って何？」
「ん、ただの高級アイス。」
「あ、ハーゲ〇ダッツだ。なんでこんなに数があるの？」

「心優しい先輩が奢ってくれたの。ほんと平和な世の中だよ。」
　あくび混じりに真桜は袋からアイスを３つ取り出す。
「ほら、どうせだから４人で食おうぜ。」
「やったー！」
　あこは真桜の手からアイスを受け取り、蓋を開ける。
「ほら、お前らも食えよ。」
「えっと……ありがとう。」
「ごちそうになるね、真桜くん。」
　明日香と六花もアイスを受け取り、同じように蓋を開ける。
（あれ……なんか真桜くんの手の甲が妙に汚れてるような……？）
　ふと、真桜の手の甲に妙な汚れがあることに気がつく。よく見るとそれが血痕のように見えなくもない。
「ん？どうした六花、そんな俺の方見て？」
「えっ!?い、いや何でも無いよ!?」
　無意識の内に真桜の方を見すぎていたのか、六花は顔を赤くしながら慌ててアイスに視線を戻し、バクバクと食べ始める。
「おい、魔王。お前どんな食い方してるんだよ、配管工のおっさんみたいになってんぞ。」
「え、あ、本当だ……取って！」
「自分でやれ!!」
「こら、そこ２人！喧嘩しない！」
　六花が慌てている内に３人の方ではなにやらワイワイと話している。
（まぁ、今は考えなくてもいっか。）
　そんな光景を尻目に、六花は微笑ましそうに笑みを浮かべ、アイスをもう一口、口に入れるのだった。

第3話　魔王と勇者の愛してるよゲーム《前編》

「私、正直に言って真桜さんの事愛してますよ」
「奇遇ですね紗夜さん。俺もアンタの事愛してんですよ。」
「うふふ、相思相愛ですね、私たち。うふふふふふふ」
「みたいっすね。あはははははは」
　紗夜と真桜の2人がお互いに対して愛の言葉を言っていると言うのに、この2人の目は氷点下を通り越して絶対零度というのも生温いほどの冷え切った瞳をしている。
「う～ん……なんか違うなぁ……」
「リサ、やっぱりこれは失敗よ」
「ひ、氷川さんと真桜さんの目が……こ、怖い……です……」
　そして、そんな愛の言葉を囁き合う（？）2人を眺めるリサ、友希那、燐子の3人。部屋の隅で飲み物を飲みながらリサは悩ましげな声を漏らし、友希那は「やっぱりこうなるのね……」と言いたげな呆れた顔をし、燐子は2人の冷たい瞳を見て萎縮している。
「おはようございまーす！」
　そして、このタイミングで魔王こと、Ｒｏｓｅｌｉａのドラム……宇田川あこが練習室に顔を出す。
「いーや、俺の方が紗夜さんの事愛してます。そりゃもうこの世でもトップレベルに愛してますって。今すぐ悲鳴を轟かせたいくらいには。」
「いえ、私のほうが真桜さんのことを愛してます。今すぐ襲いかかって泣き叫ぶくらい滅茶苦茶にしたいほどには愛してるんですよ？」
「あっはっはっは」
「うふふふふふふ」
　あこが扉を開け、練習室にはいるとそこにはお互いに愛の言葉をささやきながらお互いに絶対零度の瞳を向ける真桜と紗夜がいたのだ。
「ま、真桜とさ、紗夜さんが……っ!?」
　扉の入り口で二人の声を聞き、真っ青な顔で絶望の表情を浮かべるあこ。

「う、宇田川さん!?」
「あ、やっべ」
紗夜は扉の前で絶望するあこを見つけ驚き、真桜は小さく焦りの声を漏らす。
「ま、真桜が……真桜がぁ……っ！」
あこは扉の前で瞳に大粒の涙を浮かべ、声を小さく漏らし始める。
「あらら……真桜、あとは頑張ってね☆」
「真桜？あこが泣いてるわよ。なんとかしなさい。」
「真桜さん、早くあこちゃんを泣き止ませて下さい。」
「悪いの俺だけなの!?」
リサ、友希那、燐子の３人に半ばボロクソに言われ、真桜がキレるが、時既に遅し……
「真桜が紗夜さんに盗られたあああぁぁぁぁ!!!!!!」
「落ち着けぇぇぇぇぇ!!!!」
その日。Ｃｉｌｃｌｅの練習室には、あこの泣き声が轟くのだった。

あこが到着する約数分前。
「湊さん、すみません……少し仮眠を取らせて下さい……」
「構わないわ。どうせまた真桜関連の苦労でしょう？」
「えぇ、まぁ……」
トボトボと少し疲れた様子で練習室を出ていく紗夜。
「ねぇ、アタシは真桜の事にそんな詳しい訳じゃないから分からないけど、花咲川の方で何かやったの？」
リサがベースをいじる手を止めて花咲川の生徒会長である燐子に尋ねる。
「い、いえ……真桜さんは……その……したと言うより、された側の人で……」
「どゆこと？」
燐子が紗夜の出て行った扉の方を見つめながら解説を始める。

「真桜さんが花咲川の近くを通った際に不良に絡まれて……絡んできた不良を花咲川の敷地内に不法投棄して帰ってしまうことがここ最近頻発してるんです」
「えぇ……」
　リサが思わず呆れたような声を漏らす。
「氷川さんはその後始末に追われて、結果あんなにやつれてしまって……真桜さんも不良に絡まれないように気をつけるとは言ってたんですが……あの見た目と性格なので……」
「あらら、そりゃあ紗夜も怒るよね～」
「はい……今、氷川さんと真桜さんが出会ったら、恐らく氷川さんが大変なことになってしまうかも知れないです……」
　思わずその場にいる3人が紗夜の出ていった扉を見つめる。
　ガチャ
「お、魔王と紗夜さん以外ぜーいんいるんすね」
「あ、噂をすればだ。」
　不意に扉が開いたと思うと、Ｃｉｌｃｌｅのスタッフ制服を着ている真桜が現れる。
「あ、これうちの上司（まりなさん）からの差し入れっす。全員分のジュースなんで飲んでおいて下さい。」
　真桜の両手には計5本のジュースが抱えられている。
「あ、これは猫先輩の分で～、こっちはりんりん先輩ので～、これはリサ姐の分～、そんでもってこれが魔王の分、そんで最後に紗夜先輩の分っと。」
　近くの机の上にノリノリで並べていく。
「助かるわ真桜。」
「あ、ありがとうございます……」
「ありがと～」
　3人がそれぞれの分のジュースを順に取り、最後にはブドウジュースとサイダーが残る。
「あ、このサイダーは紗夜さんのだから俺が渡してきますね～」
「「ぶっ!?」」

真桜は机の上に置かれたコーラを手に取ると、3人がいる眼の前で全力で振り始める。突然のその行動に3人も思わず飲んでいた飲み物を吹き出す。
「ほっ、よっ、ふっ、はっと。」
その場でお手玉でもするかのように投げ、振り回し、回転させる。唖然とする3人をよそに真桜は楽しそうにペットボトルを振り回す。
「そんじゃ俺はこれで。あ、魔王が来たらそのジュース渡しといてくださいね～」
ガチャ
そして真桜は扉をあけて仮眠中の紗夜の元へ向かう。
「……いやいやいや！　流石にアレは止めないとマズイでしょ!?」
「いえリサ、もう既に手遅れよ……」
「多分、1分後くらいには紗夜さんの悲鳴が……」
3人が扉の近くに寄り、耳をくっ付けて外の音を探る。
「あ、紗夜さん何でこんなとこで寝てるんですか？　年ですか？」
「誰のせいだと思ってるんですか……怒りますよ？」
「え、俺のせいなの？　今月に入って俺が紗夜さんにしたことといえば……丸山先輩を脅しｔ……じゃなくてお話して紗夜さんのポテトにハバネロの粉末混ぜたことくらいですよ？」
「あのハバネロポテトはあなたが主犯だったんですか……（怒）」
「あ、俺その時の状況現場にいなかったんで知らないっすけど、おいしかったですか？」
「ハバネロごときが私のポテト愛を妨害できると思ったのなら、大間違いです」
「え、あの量のハバネロポテ完食したんですか？　えぇ……（ドン引き）」
2人の会話を扉越しに聞く3人。
「なんか……思ったよりも仲が良いわね。」
「っていうか、紗夜のあのハバネロポテトは真桜が黒幕だったのか～」
「今井さん、知っているんですか？」
「まぁねー、この前紗夜とご飯食べに行ったときに、紗夜の注文したフ

ライドポテトにだけ赤い粉末が大量に掛かってたから……」
「……食べたのね？」
「食べたんですね。」
「うん、もりもり食べてた。」
　いつかの日の食事を思い出すリサ。
「あ、それはそうと疲れて喉乾いてるんじゃないですか？　これうちの上司からの差し入れです。」
「あぁ、サイダーですか……ありがとうございます。あとでまりなさんにもお礼を言っておいて下さい。」
「いえいえ～、あ、それより冷えてるんで早く飲んだほうが良いですよ。」
「わかりました……きゃあああああああ!!!!!」
　扉の外から聞こえる悲鳴に3人共ため息を吐く。
「ついに……はじまったわね……」
「どれくらいかかると思います？」
「う～ん、1時間位？」
　3人がそれぞれ、2人が言い争うであろう時間を予測する。このことからも、2人が普段からどれだけ言い争っているかが分かるだろう。
「とりあえず行ってみよっか。」
「そうね」
　扉を開けるとそこには、案の定というべきか、地獄絵図が広がっていた。
「なんてことをするんですか真桜さん!!!」
「あ、さーせんそれおもいっきり振ってたの忘れてました～」
「絶対わざとじゃないですか!!　怒りますよ!!」
「もう怒ってるじゃん」
「やかましいです！　だいたい貴方はいっつも問題ばっかり起こして！　そんなんだから宇田川さんに対してヘタレなんですよ!!」
「はぁ!?　魔王はなんも関係ねぇだろ!!」
「この前宇田川さんにいきなり抱きつかれて大好きって言われて裏で

喜んでたじゃないですか!!　さっさと告白して付き合えば良いんですよ！」
「うるせぇ！　そんなのアンタに決められる筋合いはねぇだろ!!」
　２人の言い合いを傍観する３人。
「なんか話が変な方向にシフトチェンジしてない？」
「はい……いつの間にか話がお互いの悪口から……真桜さんの告白の件になってますね……」
「見てみなさい……あの２人、言い合いをしすぎて会話のレベルが小学生にまで低下しているわ……」
　友希那が２人の様子を再び確認する。
「紗夜さんのバーカバーカ！」
「授業寝てる真桜さんに言われたくないですよバーカ！」
「なんで俺が授業寝てること知ってんだよ！」
「あなたの行動なんて宇田川さんの惚気話で全部筒抜けです！　逃げられると思ったら大間違いですっ！　残念でしたねバーカ！」
　最早高校生の会話ではない。
「はぁ……２人の喧嘩癖にも困ったものね。」
「目と目が合った瞬間にはもう……喧嘩をする日々です……」
「う～ん……あっ、この方法ならもしかして！」
　突如リサが手を叩き、まるで名案が浮かんだかのような顔をする。
「リサ、どうにかして２人を仲直りさせる方法でも思いついたのかしら？」
「うん、まぁね～♪」
　友希那の質問にノリノリで応えたリサは、絶賛喧嘩中の真桜と紗夜に近づく。
「ねぇねぇ２人とも～、ちょっと良いかな？」
「あ？　なんすかリサ姐。」
「何か用ですか今井さん？」
　流石に２人も、喧嘩の間にリサが入ってきたことで言い合いを止める。そしてリサは、２人の動きを一瞬で止める魔法の言葉を言い放つ。

「2人ともいっつも〝嫌い〟とか〝バカ〟って言ってるけど、側から見たらソレ、お互いが照れ隠しで言ってるようにしか見えないよ？」
「「……なっ!?」」
　リサのたった一言で、真桜と紗夜は顔を真っ赤にしてフリーズする
「……俺、紗夜さんのこと前々から結構好きでしたよ」
「……奇遇ですね真桜さん、私も貴方のことが前々から好きだったんですよ」
　そして、真桜と紗夜の2人はどこかぎこちなくも、お互いの顔を見ずに〝好き〟と言い始める。
「どう？」
「ナイスよ、リサ」
「ナイスです、今井さん」
　リサが2人の方を見ると、友希那と燐子がリサに向けてサムズアップする。
「まぁ、これで喧嘩も収まるでしょうね」
「アタシ達はアタシ達で、練習しよっか？」
「そうですね……あこちゃんが来るまで、まだ時間もありますし……」
　そんな感じのなんとなくの雑談をしながら3人は紗夜と真桜よりも一足先に練習室に戻るのだったが……
「遅いわね、紗夜。」
「う～ん……アタシ達が練習室に戻ってから10分近く経ったけど、まだ戻って来ないね、紗夜……」
「まさか……まだ真桜さんと言い合いをしている……とか？」
「いや～、流石にそんなに長く言い合いをする訳……」
「そうよ、いくらあの2人でもそこまで馬鹿じゃ……」
　ふと、燐子の発言にてリサと友希那の言葉が詰まる。
「「……」」
　一度楽器をいじる手を止めると、3人は再び練習室の外へ向かい、扉を開ける。
「だから！　私は貴方のことが誰よりも好きなんです！　異論は認めません！」

「それだったら俺だって紗夜さんのこと好きだね！　そりゃもう1番好きだわ!!」
「「ぐぬぬぬぬぬっ!!」」
　扉を開けるとそこには、もはや怒鳴り合いレベルで告白をする紗夜と真桜の2人がいた。
「ねえ、あの2人は何がしたいの？」
「さぁ？　変わったカップルがいるものね……」
「ねーねーおかーさん、僕知ってるよ！　あれってバカップルって言うんでしょー？」
「コラッ、指を刺しちゃいけません！」
　廊下でイチャイチャしている2人を指さす来客が残した言葉が、その状況を見ていた3人の心に突き刺さる。
((うちの子達が……本当にすみません……))
　3人とも、申し訳ない気持ちでいっぱいになるのであった。
「俺の方が紗夜さんのこと好きだ！」
「いいえ！　私の方が真桜さんのこと好きです！」
「はいはいっ！　もうその件はいいからとりあえず2人とも中に入ろっか!!」
「ちょっ、今井さん!?」
「何するんすかリサ姐！」
　2人の様子を見かねたリサが2人の襟首を掴み、音漏れの心配がない練習室へと引っ張る。
「お願いだから2人とも、これ以上恥を晒さないでちょうだい……」
「その……多くの人が見ているので……」
「離せよリサ姐！　俺まだ紗夜さんに言っておきたいことがあるんだけど!?」
「離してください今井さん！　私は真桜さんにまだ伝えなきゃいけないことがっ！」
　結局、友希那と燐子の心の底からの声を2人は聞いておらず、そのまま2人は練習室へとリサによって強制入場させられるのだった。